



疑問語「ダレ」につく「も」と「でも」の使い分け  
について：動詞述語文（動作動詞）を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 侃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017965">https://doi.org/10.24729/00017965</a>

## 疑問語「ダレ」につく「も」と「でも」の使い分けについて — 動詞述語文（動作動詞）を中心に—

周侃<sup>注1</sup>

### 1. はじめに

本稿の目的は、疑問語につくとりたて助詞「も」と「でも」の使い分けを、従来うまく説明されていない点について明確にし、日本語教育に役立てることである。

両者の使い分けの問題は、日本国内の日本語教育現場において、以前から存在しているものであるが、中国国内の中国語母語話者に対する日本語教育の現場においては、より顕著な問題として現れる。

なぜなら、中国語の場合、「も」と「でも」は、下記2例のように、どちらも「都」と訳される場合があるからである。

- ・原文：「防空壕が裏にあります」と能島さんが云ったが、誰も立って行かなかった。  
訳文：能島先生说：“后面有防空壕”，可谁都站着不动。（『黒い雨』）
- ・原文：学生課で調べたんだよ、もちろん。誰でも調べられる。  
訳文：在学生科查的呀、还用说。谁都可以查的。（『ノルウェイの森』）  
(BJSTC 中日対訳語料庫 (中日対訳コーパス))

日本語学の分野では、長年にわたり、この問題についての研究が行われてきた。「2. 先行研究」で詳しく述べるように、主に否定の述語と共起するか、肯定の述語と共起するかにより、両者を区別できると説明されることが多く、また理論的に「でも」に対し特別な位置づけをあたえている研究もある。しかし、前者の記述は、不十分なところがあり、両者の区別を体系的に考察できていないと考える。また、後者の主張は、そのままでは日本語教育に応用できないと考えている。

よって、本稿は、上記の後者が主張する理論を具体化させることにより、「現実性」という概念を用いて、疑問語につく「も」と「でも」の使い分けの問題を解決することを試みる。第4節で詳しく説明するが、具体的には、まず疑問語「ダレ」に「も」と「でも」がつく動作動詞を用いる動詞述語文について考察を行う。

以下の第2、3節で、疑問語につく「も」と「でも」に関する先行研究と、「現実性」に関する先行研究を分けて説明していく。第4節で、「現実性」という概念を使い、疑問語「ダレ」につく「も」と「でも」の構文的な分布の違いを考察する。第5節をまとめとする。

### 2. 疑問語につく「も」と「でも」についての先行研究

#### 2.1 肯定/否定の述語との共起という観点からの記述について

疑問語につく「も」と「でも」の使い分けについて、今までの研究では、主に否定の述語と共起するか、肯定の述語と共起するかにより、両者を区別できるとされてきた（寺村(1991)など）。

しかし、「も」が否定の述語と共起するという傾向は、疑問語によっては例外があると

いうことも、すでに論じられている。

例えば、日本語記述文法研究会（2009）では、「どれ」、「どちら」、「どの+名詞」に「も」がついたものは、否定、肯定のいずれとも共起すると書かれている。

疑問語のうち「どれ」「どちら」および「どの」+名詞に「も」がついたものは、否定だけでなく、肯定の述語とも共起する。肯定の述語と共起した場合は、同類のものすべてを肯定する意味になる。

- ・料理はどれも{おいしくなかった/おいしかった}。
- ・和食と洋食のどちらも{おいしくなかった/おいしかった}。
- ・どのデザートも{おいしくなかった/おいしかった}。

（日本語記述文法研究会（2009）pp. 162-163）

その一方で、「基本的に否定の述語と共起」（p. 162）する、疑問語につく「も」の用例としては、「だれ」、「何」、「どんな」「どこ」などの疑問語を用いる文が挙げられている。

- ・昨日の反省会にはだれも参加しなかった。  
（中略-筆者）
- ・父はパソコンについて何も知らない。
- ・田中さんはどんな酒も飲まない。
- ・今度の休みにはどこへもでかけないつもりだ。
- ・弟は昨日からだれとも口をきかない。

（日本語記述文法研究会（2009）p. 162）

しかし、まず疑問語「だれ」の場合について、すでに中西（2006）に考察されているように、肯定の述語と共起する場合がある。

1) 「だれも」が肯定述語と結びつくのは、「仮定的な全部肯定」「一括の全部肯定」の解釈が可能な文脈にかぎられる。

（例） {だれもが/だれでも/\*みんなが} 当たるといふ驚異の宝くじ必勝法について説明しよう。（仮定的な全部肯定）

（例） ファッション界では{だれもが/?だれでも/みんなが}、小池さんを「先生」と呼ぶ。（一括の全部肯定）

（中西（2006）p. 38）

中西（2006）の考察は、肯定の述語と共起する場合に焦点を絞ったもので、また、他の疑問語についても言及していないが、コーパス検索アプリケーション「中納言」で『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を検索してみると<sup>注2</sup>、「どんな」、「どこ」を用いる文にも、肯定の述語と共起する例が見られる。

- (1) 心の持ちようでどんな苦難もしのげる。 (LBk8\_00016)
- (2) 上海にせよ北京にせよ、旧市街はどこも同じである。 (LBe3\_00003)

この結果からみると、主に否定の述語と共起するか、肯定の述語と共起するかという観点から、疑問語につく「も」と「でも」の使い分けを明確にすることには、限界があると

言わざるを得ない。

そこで、本稿では、「現実性」という観点からの記述を踏まえ、この問題についての説明を試みる。

## 2.2 「現実性」の観点からの記述について

「現実性」の観点からの分析においては、「でも」を中心に記述が行われており、その主要な研究として、野田（1995;2019）、日本語記述文法研究会（2009）、星野（2020）などが挙げられる。

野田（1995）では、「も」については、従来の研究と同じく、「基本的に、肯定否定の階層のもので、否定的な述語と呼応するものだと考えられる。」（p. 28）とするが、「でも」に関しては、「仁田義雄（1989）で示されたモード（様態）<sup>注3</sup>というカテゴリーに対応した、現実性という階層を設定」（p. 19）し、以下のように「現実性」の観点から説明している。

このように、意外の「でも」は、アスペクトの階層ともいくらか関係があるが、基本的には現実性の階層のもので、仮定や可能性の述語と呼応するものだと考えられる。

（野田（1995） p. 29）

そして、野田（2019）でも、「でも」が働く階層を含む記述について、「野田（1995）で提案されたものと基本的に同じである」（p. 15）と述べている。

しかし、仁田（1989）でも、野田（1995 ; 2019）でも、それぞれ「現実世界での事態」、「現実性」などの概念が、具体的にどのような定義でまとめられるかについて説明されていない。

日本語記述文法研究会（2009）では、「現実性」に関わる概念について、「可能かどうか、許容されるかどうか、必要かどうか」「単純な事実や過去の1回だけの出来事」などの言い方を用いて、「でも」について、より具体的な記述がなされている。

「でも」は「たとえ～でも」という仮定的な意味を含むため、「疑問語でもP」は、どのような条件のもとでもPが成立することを表す。Pにくる表現は何でもよいわけではなく、基本的には、可能かどうか、許容されるかどうか、必要かどうかなどを表す表現である。単純な事実や過去の1回だけの出来事には用いにくい。たとえば、次の(1) (3)のような文は不自然である。（略一筆者）

・\*今日の反省会にはだれでも参加した。 …… (1)

（略一筆者）

・?いつも給食を残す田中君が今日は何でも食べた。 …… (3)

（日本語記述文法研究会（2009） p. 164）

しかし、「現実性」の観点から問題を説明する場合には、まずこの「単純な事実や過去の1回だけの出来事」について、もう少し詳しい説明が必要となる。たとえば例(3)のように、「過去の多回的な出来事」において「でも」は用いられるが、これが、「単純な事実や過去の1回だけの出来事」のいずれにも該当しないかどうか、端的には「単純な事実」と「過去の多回的な出来事」との関係について検討が必要と考えられる。

(3) ところがこの飢饉のときは、くる客はだれでも手あつくもてなした。(LBr2\_00031)

そして、問題はこれだけではない。奥田(1992)は、動詞の継続相も現在継続的に存在している動作だとしており(pp. 40-41)、現在継続的に存在している動作は、「現実性」の動作だと考えられる。

「でも」が、単純な事実においては用いにくいとするなら、例(4)における「でも」を用いる動詞述語は、「単純な事実」ではないことを説明する必要があるが、日本語記述文法研究会(2009)の記述だけでは、この点についても不明である。

(4) ラーメンといえば、極めて身近な食べ物である。誰でも知っている、誰でも食べている。(LBq5\_00070)

星野(2020)は、「現代語の副助詞デモの各用法」について考察を行い、「デモ」を「A 全該当の可能性の擬似的表示・全該当の可能性の例示」；「B 暫定抽出」；「C 不成立事態実現の想定」(p. 387)の3類に区分した上で、「A デモの可能性言及の性格について」記述している。

このためAデモは往々にして、事の一般的な性格に言及する。「彼は何でも言う」は彼の人となりの表現であり、個別事態への言及ではない。これは「可能性」を述べる性質の反映である。この性質上、コトを一つに確定する一回的既定事態に馴染まないのは当然であろう。寧ろ、Aデモは過去文そのものを拒むのではない。「全Qが実現し得た可能性」が留保されるなら過去文も成立するのであって、「あの頃は何でも食べた」のような「過去の極端な生活状況の表現」は可能なのである。「\*昨日何でも食べた」が非文であるのは、「昨日」が近く狭すぎて、文意が可能性の範囲に留まるのを妨げるからである。

(星野(2020) p. 381)

しかし、例(5)のような過去文は、全Qが実現し、可能性の範囲に留まっていない文だと考えられるが、「でも」が用いられている。

(5) かれは、江戸時代からの日本の商家のしきたりを極力壊そうとした。経営を大きく働社中と元金社中に分けたのもそのためである。「日本の商家の悪いところは、世襲制と、大福帳だ」かれは常にそういつていた。西洋簿記については店の中で使っただけでなく、希望者には誰でも講習をした。(LBh6\_00019)

よって、「Aデモ」の用法について、星野(2020)の記述だけでは、うまく説明できない場合があり、さらに深く考察する必要があると考えられる。

### 2.3 まとめ

ここまで見てきたように、主に否定の述語と共起するか、肯定の述語と共起するかという観点から、疑問語につく「も」と「でも」の使い分けを説明することには、限界があると言わざるを得ない。

また、「現実性」という観点からの分析においては、これまで「も」に関する記述は少なく、主に「でも」に対し考察が行われてきた。しかし、第3節でさらに詳しく説明する

が、そもそも単文及び複文の主節における「現実性」については、明確な定義が行われていないため、今までの研究の記述だけでは、この問題をうまく解決するのは難しいと考えられる。

よって、本稿では単文及び複文の主節における「現実性」について考察するとともに、従来の研究ではうまく説明されていない上記の問題について、「現実性」という概念を用いて、明らかにすることを試みる。そのために、以下で、まずこれまでの「現実性」に関連する先行研究を整理し、本稿で行う考察との関係について説明していく。

### 3. 「現実性」についての先行研究

#### 3.1 奥田靖雄の主張

「現実性」という概念について、奥田（1986；1996；1999）の一連の研究では、「リアリゼーション」により、主に「可能表現の文」と「必然表現」の文を中心に考察が行われている。これらの研究は、単文及び複文の主節に用いられる「リアリゼーション」を取り上げており、「リアリゼーション」に着目した日本語の研究として、大変重要な意義を持つが、「リアリゼーション」とは何かということが、具体的に定義されていない。

奥田（1986）の説明を例として示す。

はなし手が自分の立場から現実の世界の出来事を確認して、それを内容にうつしとりながら、つたえる、通達的なタイプのひとつとしての《ものがたり文》のことをごく一般的にこのように規定しておく。とすれば、確認される現実の世界の出来事が、リアリゼーションの観点からみて、現実性としての動作・状態でもあるし、可能性としての動作・状態でもあるし、必然性としての動作・状態でもあるので、《ものがたり文》はする、することができる、しなければならないに代表される、みつつの文のタイプにわけなければならなくなる。

（奥田（1986）p. 182）

しかし、以下に示す奥田（1992）の記述は、本稿で考察を試みる「現実性」の定義と、「も」と「でも」の使い分けの問題に繋がると考える。

表1に、「反復」などの概念を含む、動詞の完成相と継続相の過去・非過去の形が表す意味について奥田（1992）の説明を抜粋の形でまとめた。

表1 動詞に関する奥田（1992）の説明

完成相の非過去	いわゆる「する」のかたちは、動詞の大部分をしめている動作動詞、変化動詞についていえば、とくべつな条件がつけられているばあいをして、 <u>未来における具体的な動作、変化をさしだしている</u> 。(p. 55)（下線は筆者による）
完成相の過去	いわゆる「した」というかたちは、はなし手のはなすモメントまでの、なんらかの時間帯に動作、変化、状態が存在していることを一般的に表現する。(p. 59)
継続相	…（略・筆者）つまり、 <u>継続相によってさしだされる動作は、設定された時間の座標軸をまたい</u>

	<p><u>で継続的に存在し、過程的な性格をおびている。</u>  <u>この時間の座標軸は、なによりもまず、はなし手のはなすモメントである。したがって、現在テンスは、このモメントをまたいで動作が存在していることを意味している。</u> (pp. 40-41) (下線は筆者による)</p> <p>継続相の過去の「していた」というかたちは、過去に設定した時間の座標軸をめぐって、継続している、具体的な動作あるいは状態をさしだしている。 (p. 62)</p>
反復	<p>… (略・筆者) <u>反復をくみだてている具体的な動作は、具体的な時間のなかには限りなく限定をうけておいては、時間の抽象化がすでに始まっているのである。</u> 日本語では、<u>この単純な反復は完成相によっても継続相によっても表現されているが、完成相のばあいでは過去のかたちのなかに反復する動作をとらえていて、ひとまとまり性をつよおびてくる。</u> 継続相の過去のかたちでも<u>反復的な動作がいろいろあらわされているが、非過去のかたちで過去から未来にいたるまでの反復的な動作をさしだすことができる。</u> (p. 71) (下線は筆者による)</p>

本稿は基本的に、この奥田 (1992) の記述に基づき考察を行うが、これらの文における「現実性」の定義を明確にするために、以下の須田 (2010) と前田 (2009) の記述も参考にする。

### 3.2 須田義治 (2010) の記述

本稿で言う動作動詞を用いる動詞述語文における「現実性」については、須田 (2010) の記述を参考にするが、異なるところがある。これを説明するために、以下でまずモダリティの研究に関する須田 (2010) の記述について見ておく。

須田 (2010) では、「現実性・非現実性、アクチュアリティ、ポテンシャルティ」などの概念が以下のように記述されている。

現実性では、主語にさしだされるものと、述語にさしだされる特徴との結びつきが、話し手によって現実のなかに確認されるが、非現実性では、それが、現実においては確認できないままに、話し手の思考過程において結びつけられる。現実性は直接的な認識であり、非現実性は間接的な認識であるとも言えるが、いずれも、話し手の思考過程に媒介されている。

次に、アクチュアリティとポテンシャルティは、動作の現れが顕在的か潜在的かという、話し手の認識に対する現れ方の違いを反映している。たとえば、現在における一回的な動作は、ある時点において顕在化して観察可能であり、アクチュアルであるのに対して、習慣的な動作は、ある時点においては直接的に観察することができず、ポテンシャルである。だが、習慣的な動作も、一回的な動

作と同様に、現実において、反復する動作として存在しているものを、そのまま、とらえたものであって、話し手の思考に媒介された、話し手の思考過程を反映するものではない。どのようなスケールでとらえたかの違いなのだろう。このように、ポテンシャルティは非現実と異なる概念なので、現実性・非現実性とアクチュアリティ・ポテンシャルティは交差する。たとえば、「彼は、毎日、学校へ行くだろう。」は、ポテンシャルティと非現実性との組み合わせである。

(須田 (2010) p. 307) (下線は筆者による)

上記のように、須田 (2010) では、「現実性」と「非現実性」は、「断定や推量や命令などのムード的な意味」(p. 307) を含むものであり、「話し手の思考過程に媒介されている」(p. 307) 点において、「話し手の思考に媒介された、話し手の思考過程を反映するものではない」(p. 307) 「アクチュアリティ」と区別されるが、本稿では「アクチュアリティ」で直接的に観察できる動作を、「現実性+」に対する確認として使い、「現実性+」に属するものだと考える。

これ以降、本稿では、説明の便宜上、「現実性」を「現実性+」、「非現実性」を「現実性-」と呼ぶこととする。

### 3.3 前田直子 (2009) の記述

前田 (2009) により、奥田 (1986 ; 1996 ; 1999) では詳しく言及されていない「現実表現」の文が細分化されたため、本稿では、前田 (2009) の「事實的レアリティー」と「中間的な存在」などの概念も取り入れ、奥田 (1992)、須田 (2010) の説明を組み合わせ考察を行う。

前田 (2009) では、「レアリティー」という用語を用いて日本語の条件文と原因・理由文について記述を行っており、条件文の分類の中で、「非仮定的レアリティー」における「事實的レアリティー」と、「仮定的レアリティー」との「中間的な存在」、即ち反復・習慣的な事態について言及している。<sup>注4</sup>

#### (2) 非仮定的レアリティー

条件文には、前件・後件がともに既に生起した事実である場合もあることは知られている。このような事態のレアリティーを「非仮定的レアリティー」と呼ぶ。

9) 太郎が殴ると、花子が泣き出してしまった。

この文では、「太郎が殴った」ことも、「花子が泣き出した」ことも事実である。こうした事態のレアリティーを非仮定的レアリティーのうち、「事實的レアリティー」と呼ぶ。

また非仮定的レアリティーには、仮定的レアリティーとの中間的な存在がある。即ち多回的な事態を表す場合である。条件文で言えば、多回的な場合の一つは、いわゆる一般条件・恒常条件と呼ばれる条件文の用法であり、これはテンスの分化を持たない。もう一つは反復・習慣と呼ばれる条件文の用法であり、こちらには、テンスの分化がある。

10) 水は百度になると沸騰する。

11) 若い頃はお酒を飲むと頭が痛くなった。

(前田 (2009) pp. 38-39)

しかし、前田 (2009) の「レアリティー」に関する記述は、従属節に限られており、英

語学の反事実仮想につながる。本稿は、「現実性」という概念を、動詞述語文の単文及び複文の主節についての考察に用いる。

### 3.4 まとめ

ここまで見てきたように、今までの研究では、日本語の単文及び複文の主節における「現実性」とは何か、具体的に定義されていない。

そこで、本稿では先行研究の記述を踏まえて、「現実性」について具体的な定義を行い、これにより疑問語につく「も」と「でも」の使い分けの問題を考察していく。

## 4. 考察

### 4.1 考察対象

本稿で考察するのは、疑問語「ダレ」<sup>注5</sup>に「も」と「でも」がつく動作動詞を用いる動詞述語文である。以下でその理由を述べる。

まず、日本語記述文法研究会(2009)では、基本的に否定の述語と共起するとされる「疑問語+も」を用いた文の具体例において、疑問語「だれ、何、どんな、どこ」が挙げられている。

そして、基本的に肯定の述語と共起するとされる「疑問語+でも」を用いた文の具体例において、疑問語「だれ、何、いつ、どんな、どこ」が挙げられている。

疑問語ととりたて助詞の結びつきが強く、一語の副詞としても扱われることのある「いつ+も/でも」「何+も/でも」「どこ+も/でも」<sup>注6</sup>については今後の研究で順次見ていくこととし、本稿ではまず「ダレ+も/でも」「どんな+名詞+も/でも」について検索を行った。その結果、「ダレ+も/でも」の用例数が多いため、今回の考察の対象とした。「どんな+名詞+も/でも」についても今後別稿で考察していく。検索方法については文末に示す<sup>注7</sup>。

表2 検索結果の内訳

疑問語+ も/でも	ダレ+も	ダレ+でも	どんな+ 名詞+も	どんな+ 名詞+でも
用例数	6924 例	1969 例	476 例	970 例

また、「現実性」に関する先行研究の記述を踏まえて考えると、過去の一回だけの出来事、過去の多回的な出来事などの意味を表す文は、必ず具体的な動作を伴う動作動詞を用いると考えられるため、本稿では、「愛する」などの心理動詞と、存在動詞「いる、ある」を考察の対象から外し、具体的な動作を伴う動作動詞の動詞述語文を考察した。なお、本稿で考察するのは、単文及び複文の主節であり、動詞述語は肯定/否定の両方を含む。

### 4.2 「現実性」と動詞述語の形・意味との対応についての仮説

まず、前田(2009)の用語を使い、「現実性+」における事実的な出来事と反復的な出来事を、それぞれ「事実的レアリティー」と「反復(的な出来事)」と呼ぶことにする。

次に、奥田(1992)の説明に基づき、特別な条件がつけられている場合を除いて<sup>注8</sup>、動詞の「る形」、「た形」、「ている形」、「ていた形」<sup>注9</sup>の表す意味を、「現実性+」・「現実性-」の観点から、以下のようにまとめた。

表3 仮説（現実性と動詞述語の形・意味との対応）

		る形	た形	ている形	ていた形
現実性+	事実的リアリティー	-	○	○	○
	反復（的な出来事）	-	○	○	○
現実性-		○	-	-	-

つまり、動詞述語が「る形」の場合、「現実性-」の文にのみ用いられる。動詞述語が「た形」、「ている形」、「ていた形」の場合、「現実性+」における「事実的リアリティー」と「反復（的な出来事）」の文のいずれにおいても用いられるが、「現実性-」の文においては用いられない。

以下で、表3を使って、疑問語につく「も」と「でも」の文を分析し、また分析の結果から、表3に対する補足、修正を行う。

### 4.3 疑問語「ダレ」につく「も」について

#### 4.3.1 分類の結果

表2で示している「ダレ+も」6924例の中から、動作動詞を用いる動詞述語文を抜き出すと232例あった。これを奥田（1992）の説明を参考に、それぞれ「る形、た形、ている形、ていた形」の違いで分類した結果が、表4である。

表4 分類の結果

	ダレも	
	みとめ	うちけし
る形	-	112例
た形	-	71例
ている形	-	37例
ていた形	-	12例
合計	232例	

#### 4.3.2 具体的な用例と分析について

先行研究で述べたように、動作動詞を用いる動詞述語文における「現実性」について、本稿では須田（2010）における「アクチュアリティ」を「現実性+」に対する確認として用いて分析を行っていく。以下でそれぞれの場合について、該当の用例を2例ずつ示して説明する。

「る形」の用例と分析

「る形」：「現実性+（事実的リアリティー）」

(6) 研次郎は午後二時に遅れないように赤坂のホテルへ向かった。副頭取の栗山好章が部屋で待ちかまえている筈だ。五分前に着き、二時になるのを待つ。フロント脇にあるクリーム色の受話器を手にしてルームナンバーをプッシュする。室内で響くベルの音が彼の耳にも届く。誰も出ない。五分待って、もう一度電話をした。結果は同じだ。おかしい。部屋まで行ってみようかとも考えたが、思いとどまった。(LB19\_00188)

(7) 古江浜の港には漁船が7隻停泊していた。ぼくは防波堤で漁師の待ち伏せを始めた。しかし、1時間以上待っても誰も現れない。(LBm2\_00030)

「る形」：「現実性-」

- (8) よくやるのが麵を使ったよろず全般で、一番手っとり早いのがうどんやスパゲッティやラーメンなどを茹で、フライパンであれこれ炒めるというスタイルである。有り合わせながらも肉と少々の野菜がそこに加われれば、もう誰も文句は言わない。

(LBr9\_00146)

- (9) だいたい社説といえば奥歯にもの挟まったような言い方がふつうで、誰も読まない。

(LBg3\_00034)

まず、奥田 (1992) では、動詞の「[する]のかたち」について、「とくべつな条件がつけられているばあいをのぞいて、未来における具体的な動作、変化をさしだしている。」(p.55) としているが、例 (6) と例 (7) は、まさにそのような特別な条件が付けられている場合の実例ということになる。すなわち、「現実性+ (事實的レアリティー)」の出来事が直接的に観察、確認された場合である。

そして、このような「る形」における「現実性+ (事實的レアリティー)」の出来事は、過去から話し手が話すモメント (奥田 (1992) の説明と同じ立場を取る、以下同じ。) まで動作が観察、確認されるが、話し手が話すモメントから未来へは跨らないと考えられる。

それに対し、例 (8) と例 (9) は、どちらも仮定や可能性の意味を表す「現実性-」の文だと考えられる。

「た形」の用例と分析

「た形」：「現実性+ (事實的レアリティー)」

- (10) 一緒にラジオを聴いていた者は誰もモラートの顔を見なかった。

(LBt9\_00164)

- (11) その部屋に住む女性が管理人を呼んで、ふたりは一階上の住まいのチャイムを鳴らした。だれもドアを開けなかった。

(LBg3\_00114)

「た形」の例は、いずれも例 (10) と例 (11) のような、話し手が話すモメントより過去に直接的に出来事が観察、確認された「現実性+ (事實的レアリティー)」の例である。「た形」においては、「現実性+ (反復 (的な出来事))」の例はなかった。

「ている形」の用例と分析

「ている形」：「現実性+ (事實的レアリティー)」

- (12) ハリーは地下牢の右手を見た。だれも手を挙げていない。

(OB6X\_00179)

- (13) 達郎は磁石に吸い寄せられるように身を乗り出した。両手が小刻みに震えた。衝動がこみ上げてきた。カツラを引っ張ってみようか。誰もこちらを見ていない。

(OB6X\_00205)

「ている形」：「現実性-」

- (14) それぞれが、今日の前に迫って来ている状況をつかみあぐみ、考えあぐんで、外の風景に気をとられる余裕がないのだ。特に修三だった。それでなくても回転の早い彼の頭は、さっきからふだんの十倍もの猛スピードで回転している。いかにもおかしな

状況だ。弥太郎の話のとおりなら、親類縁者はだれも来ていない。それどころか使用人さえ居ない。そんな不便な別荘へ重態の病人が移ることからして異常なのに、祖父はわざわざその別荘へ彼を招いている。(LBk9\_00124)

- (15) ふたりは重すぎる。暑苦しいと思う時もある。でも、過去を修正も訂正もできない。どんなにすぐれた伝記作品、評論でも、ふたりの作品、書簡を超えることはできない。等身大のふたりにつきあえる扉や計りはだれももっていない。(LBt7\_00007)

「ている形」における、例 (12) と例 (13) のような文は、いずれも話し手が話すモメントに跨って存在していて、直接的に観察、確認できた「現実性+ (事実的リアリティー)」の例である。例 (14)、例 (15) のような文は、いずれも仮定や可能性の意味を表す「現実性-」の文だと考えられる。

「ていた形」の用例と分析

「ていた形」: 「現実性+ (事実的リアリティー)」

- (16) 奥の小部屋は、窓枠は朽ち、崩れた壁から隙間風が入ってくるので、誰も使ってなかった。(PB19\_00306)

- (17) ここがどこかはすぐに分かった。ケラメイコス墓地に向かうエレウシス大通りだ。道すがら、アリストテレスは他の通行人がいないかときどき振り返っていた。いくら人通りの多い大通りといえども、この寒い冬の夜には、さすがに誰も歩いていなかった。(PB59\_00662)

「ていた形」における、例 (16) と例 (17) のような文は、いずれも話し手が話すモメントまで過去に存在していて、直接的に観察され、確認された「現実性+ (事実的リアリティー)」の例である。

上記考察の結果をまとめると、表 5 のようになる。

表 5 「ダレも」の分類結果

	る形		た形		ている形		ていた形	
	現実性+	現実性-	現実性+		現実性+	現実性-	現実性+	
	事実的リアリティー		事実的リアリティー	反復的な出来事)	事実的リアリティー		事実的リアリティー	反復的な出来事)
「ダレも」	○	○	○	—	○	○	○	—
用例数	88 例	24 例	71 例	—	35 例	2 例	12 例	—

「ている形」について、例 (14)、例 (15) のような「現実性-」の文の 2 例が確認されたため、表 3 の仮説を部分的に修正した。

#### 4.4 疑問語「ダレ」につく「でも」について

##### 4.4.1 分類の結果

表 2 で示している「ダレ+でも」1969 例の中から、「ダレ+も」の場合と同じく、動作

動詞を用いる動詞述語文を抜き出すと 17 例であった。これを奥田（1992）の説明を参考に、それぞれ「る形」、「た形」、「ている形」、「ていた形」の違いで分類した。

表 6 分類の結果

	ダレでも	
	みとめ	うちけし
る形	6 例	—
た形	5 例	—
ている形	5 例	—
ていた形	1 例	—
合計	17 例	

#### 4.4.2 具体的な用例と分析について

以下で、それぞれの例を 2 例ずつ示し、具体的な分析を行う。（「ていた」の場合は 1 例しかないため、1 例を示す。）

「る形」の用例と分析

「る形」：「現実性-」

(18) アフリカ狩猟民なら、東京のサラリーマンを病気と見なすであろう。必要があろうがなかるうが、決まった時間に必死になって出勤する。それを数十年続け、ある日もういい、と言われる。それも普通は自分の都合ではなく、相手の都合である。そんなことはしないで、もう少し楽しいたらどうか。そう言ったとたんに、怒り出す。毎日苦勞して励んでいるのが、無意味だと言われたら、だれでも怒る。 (LBr4\_00024)

(19) ところが、もっとわからないことがあります。前章でも少し述べましたが、それは巡気で気が満ちてくると、一人が後ろ向きにすごい勢いで走り出す。しかも途中で増幅して走り出す、スピードが増す。野原で走ると、二十メートルぐらいは誰でも走ります。 (PB34\_00295)

「る形」における例 (18) と例 (19) のような文のいずれも、仮定や可能性の意味を表す「現実性-」の文だと考えられる。

「た形」の用例と分析

「た形」：「現実性+ (反復 (的な出来事))」

(3) ところがこの飢饉のときは、くる客はだれでも手あつくもてなした。 (再掲)

(5) かれは、江戸時代からの日本の商家のしきたりを極力壊そうとした。経営を大きく働社中と元金社中に分けたのもそのためである。「日本の商家の悪いところは、世襲制と、大福帳だ」かれは常にそういつていた。西洋簿記については店の中で使っただけでなく、希望者には誰でも講習をした。 (再掲)

「た形」における例 (3) と例 (5) のような文は、いずれも話し手が話すモメントより過去に繰り返して行われていた、過去のある時点において直接的に観察、確認できない「現実性+ (反復 (的な出来事))」の例であった。

第3節で述べた奥田(1992)と須田(2010)の記述を用いて説明すると、まず動詞の「た形」は、話し手が話すモメントまでになんらかの時間帯に動作が存在している意味を表し、その具体的な動作が一回的な動作なら、過去のその時間帯においては、動作が顕在化していて観察可能であり、「アクチュアル」であると考えられる。しかし、例(3)、例(5)のような動作は、一回だけではなく、多回的な、繰り返して行われていた反復的な動作である。反復をくみだてている例(3)、例(5)のような具体的な動作は、具体的な時間のなかにありか限定をうけとってはならず、時間の抽象化がすでにはじまっているため、ポテンシャルである。

このような話し手が話すモメントまでのなんらかの時間帯に存在しているが、反復をくみだてていて、過去のある時点において直接的に観察、確認できない動作が、「現実性+(反復(的な出来事))」だと考えられる。

「ている形」の用例と分析

「ている形」:「現実性-

(20) 蔡子明は目をそらし、電話番号を口にした。携帯電話一流氓ならだれでも持っている。  
(LB19\_00272)

(4) ラーメンといえば、極めて身近な食べ物である。誰でも知っている、誰でも食べている。  
(再掲)

「ている」形における例(20)のような仮定条件文は、仮定や可能性の意味を表す「現実性-」の例だと考えられる。

「ている形」における例(4)のような文について、本稿では、以下のように考える。話し手が話すモメントを跨いで存在している動作は、「アクチュアリティ」で、直接的に観察できる動作だと考えられるが、疑問語「ダレ」をとりたてる場合、「誰でも食べている」という動作の主体は、「誰でも」という集合であるため、話し手が話すモメントを跨いで、集合の中のすべての個体の「ラーメンを食べている」という動作を直接的に観察し、確認するのは不可能だと考えられる。もともと、不特定指示の「ダレ」に「でも」がついた場合、「ダレでも」という集合が指す範囲も明確には分らない。集合の範囲も明確に分らないため、集合に属するすべての個体の「食べている」という動作を観察できないのは、当たり前のことである。

このような直接的に観察することが不可能な動作動詞の「ている形」の文は、「アクチュアリティ」の文ではなく、本稿で考察する「現実性+(事実的リアリティー)」の文とは言えないと考えられる。よって、疑問語「ダレ」につく「でも」における「ている形」の動作動詞を用いる動詞述語文は、「ダレでもできる」のような、仮定や可能性の意味を表す文と同じく、「現実性-」の文だと考えられる。

「ていた形」の用例と分析

「ていた形」:「現実性+(反復(的な出来事))」

(21) 父親や母、祖父母、叔母の顔を見ると本を持ってきてひざの上にもまず自分が坐り、ゆっくりと童謡絵本を広げ、「ウタッテ！」とせがむ。今思えば歌が嫌いという人はいないので、誰でも峰子に言われると歌っていた。  
(LBh3\_00071)

例(21)のような文は、第3節で述べた前田(2009)で考察される「非仮定的リアリテ

ィー」における多回的な事態の意味をもつ条件文だと考えられる。

このような文を「現実性+反復（的な出来事）」と分類する理由について、以下のように考える。

例 (21) の出来事において、「峰子に言われると」という前提条件が設けられている。つまり、「峰子に言われないと」、「誰かが歌っていた」という出来事は起こらないのである。そのため、話し手が話すモメントより過去に継続していた「誰でも峰子に言われると歌っていた」という反復的な出来事を、過去のある時点において観察、確認することはできないと考えられる。

上記考察の結果をまとめると、表 7 のようになる。

表 7 「ダレでも」の分類結果

	る形		た形		ている形		ていた形	
	現実性+	現実性-	現実性+		現実性+	現実性-	現実性+	
	事 実 的 レ ア リ テ ィ ー		事 実 的 レ ア リ テ ィ ー	反 復 的 な 出 来 事	事 実 的 レ ア リ テ ィ ー		事 実 的 レ ア リ テ ィ ー	反 復 的 な 出 来 事
「ダレでも」	—	○	—	○	—	○	—	○
用例数	—	6 例	—	5 例	—	5 例	—	1 例

「ダレでも」における「ている形」の文においても、「現実性-」の文が確認され、かつすべての用例が「現実性-」の文であった。

## 5. まとめ

まず、先行研究の説明を踏まえ、本稿で考察した用例に基づき、疑問語につく「も」と「でも」の文における動作動詞を用いる動詞述語文は、A～D の「現実性」の意味から、表 8 のように分類できる。

- A. 「る形」: A1. 話し手が話すモメントまで、出来事が直接的に観察、確認された場合は「現実性+（事実的リアリティー）」、  
A2. 直接的に観察、確認できない場合は「現実性-」。
- B. 「た形」: B1. 話し手が話すモメントより過去において、出来事が直接的に観察、確認された場合は「現実性+（事実的リアリティー）」、  
B2. 繰り返して行われていて、過去のある時点においては、出来事が直接的に観察、確認できない場合は「現実性+反復（的な出来事）」
- C. 「ている形」: C1. 話し手が話すモメントを跨いで存在していて、出来事が直接的に観察、確認できる場合は「現実性+（事実的リアリティー）」、  
C2. 直接的に観察、確認できない場合は「現実性-」。
- D. 「ていた形」: D1. 話し手が話すモメントより過去に存在していて、出来事が直接的に観察、確認できる場合は「現実性+（事実的リアリティー）」、  
D2. ある条件下で繰り返して行われていた出来事が、過去のある時点においては直接的に観察、確認できない場合は「現実性+反復（的な出来事）」

表8 「現実性」による構文的分布の違い

分類	る形		た形		ている形		ていた形	
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D1	D2
ダレも	○	○	○	-	○	○	○	-
ダレでも	-	○	-	○	-	○	-	○

これにより、「ダレも」と「ダレでも」の使い分けの違いが、従来の説明より明確になったと考えられる。

これを受けて、疑問語のとりたてにおける「も」と「でも」の使い分けの問題について、日本語教育のために、これまでの研究の説明を踏まえ以下のような説明を付け加えたい。

- ・表8により、「ダレも」と「ダレでも」がともに用いられる場合について、今回の考察で確認できたのは「現実性-」におけるA2とC2のみである。この結果は、今まで言われてきた、「ダレも」は主に否定的な述語と共起し、「ダレでも」は主に肯定的な述語と共起する、という両者間の構文的な特徴の違いが、「る形」、「た形」「ている形」「ていた形」のすべてに適用できるわけではないことを示唆している。同時に、少なくともA2とC2においては、「ダレも」、「ダレでも」の両者間に、上記のような構文的な特徴の違いが存在することを確認できた。このことについて、今までの研究では明確にされていない。
- ・「2.2節」で述べたように、先行研究では、「でも」は「仮定や可能性の述語と呼応するもの」、「単純な事実や過去の1回だけの出来事には用いにくい」とされてきたが、「ダレでも」は「現実性+」における「た形(B2)」と「ていた形(D2)」のような「反復(的な出来事)」においては用いられる。

最後に、本稿の考察に基づき、表3の仮説を以下のように修正する。

表3' 仮説の修正(現実性と動詞述語の形・意味との対応)

		る形	た形	ている形	ていた形
現実性+	事實的リアリティー	○	○	○	○
	反復(的な出来事)	-	○	○	○
現実性-		○	-	○	-

つまり、動詞述語が「る形」の場合は、「現実性-」の他に、「現実性+ (事實的リアリティー)」においても用いられる。動詞述語が「ている形」の場合は、「現実性+」と「現実性-」の文のどちらにおいても用いられる。動詞述語が「た形」、「ていた形」の場合は、「現実性+」の文においては用いられるが、「現実性-」の文においては用いられない。

また、考察で確認できた「現実性+」における「る形」の用例の存在は、第4節(注8を参考)で述べた、奥田(1992)で明確にされていない「とくべつな条件」の実例になると考えられる。動作動詞を用いた動詞述語文におけるその基準をA1にまとめた。

本稿の考察の結果を生かし、他の疑問語のとりたてにおける「も」と「でも」の使い分けを体系的に記述していくことを、今後の課題とする。

注1：大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科博士後期課程（言語文化学専攻）

注2：検索方法については注7に示す。

注3：仁田（1989）では、「現実世界での事態なのか、想定世界での事態なのか、反事実に仮想された世界での事態なのか、あるいは、アクチュアルな事態なのか、ポテンシャルな事態なのか、などといった言表事態の存在のあり様の類型を、本稿では仮に<モード（様態）>と呼んでおく。」としている。（p. 53）

注4：本稿における事実に対する確認は、3.2節で述べた須田（2010）の記述を参考にする。

注5：中納言で収集したのは、「だれ」と「誰」の両方の形を含む用例であるため、本稿の考察では、先行研究や用例の引用を除き、「ダレ」という形でまとめて示す。

注6：飛田・浅田（1994）では、「何も」（「なんにも」の形を含む）（pp. 399-401）、「何でも」（pp. 414-415）、「いつも」（pp. 71-72）、「いつでも」（pp. 62-63）、「どこも」（p. 349）、「どこでも」（p. 344）が副詞として収録され、その意味、用法について記述される中で、いずれも「述語にかかる修飾語」と説明されている。

つまり、疑問語ととりたて助詞の結びつきが強く、一語の副詞としても扱われる場合があるため、本稿ではまずこのような問題が生じず、用例数の多い「ダレも」から考察を行った。他の疑問語のとりたてについては、今後の研究で順次見ていく。

注7：検索方法

以下に、中納言での具体的な検索方法を示す。

検索対象：本稿は、地の文を中心に考察するため、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議録」を除いた。

ダレも：語彙素読みが「ダレ」、後方共起1、キーから1語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

ダレでも：語彙素読みが「ダレ」、後方共起1、キーから1語、書字形出現形が「で」、後方共起2、キーから2語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

どんな+名詞+も：書字形出現形が「どんな」、後方共起1、キーから1語、品詞の大分類が「名詞」、後方共起2、キーから2語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

どんな+名詞+でも：書字形出現形が「どんな」、後方共起1、キーから1語、品詞の大分類が「名詞」、後方共起2、キーから2語、書字形出現形が「で」、後方共起3、キーから3語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

どこも：書字形出現形が「どこ」、後方共起1、キーから1語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

どこでも：書字形出現形が「どこ」、後方共起1、キーから1語、書字形出現形が「で」、後方共起2、キーから2語、書字形出現形が「も」と設定し検索した。

注8: 表1の「完成相の非過去」に示したように、奥田(1992)は本稿で考察する「る形」に関し、「いわゆる「する」のかたちは、動詞の大部分をしめている動作動詞、変化動詞についていえば、とくべつな条件がつけられているばあいをのぞいて、未来における具体的な動作、変化をさしだしている。(p. 55)と述べている。

また、同じ「完成相の非過去」(p. 55-59)の節で、「完成相の非過去のかたちで現在を表すことができる」(p. 56)動詞として、「ある」、「いる」のような存在をさししめず動詞、「あれる」、「しける」、「ひかる」、「ふぶく」のような自然現象をさししめず動詞、「たのむ」「あやまる」、「ちかう」「しんじる」「おもう」のような動詞(p. 58)、「さっぱりする」「腹がへる」「のむ」「こぼれます」「ひえます」「麻痺させてしまう」(pp. 58-59)などの動詞述語、「みえる」「きこえる」「わかる」「声が出る」「音がする」「いたむ」「しびれる」「ほてる」「うづく」「あきれる」「おどろく」「たいくつする」「どきどきする」のような「いくらかの時間的なながさをもっている、《私》の内的な体験をさししめているのであれば、そして無限界動詞であれば」(p. 57)などの例を挙げているが、「動作の大部分をしめている動作動詞、変化動詞」の場合における「とくべつな条件」(p. 55)について、明確に説明されていない。

注9: 奥田(1992)では、動詞の終止形の体系について表でまとめて説明されているが、抜粋の形で表の一部の内容を示す。

表9

		完成相		継続相	
		みとめ	うちけし	みとめ	うちけし
いいきり	非過去	はなす	はなさない	はなしている	はなしていない
	過去	はなした	はなさなかった	はなしていた	はなしていなかった

(奥田(1992) p. 17)の説明により

本稿では説明の便宜上、上記完成相の非過去形(「みとめ」と「うちけし」の両方を含む、以下同じ)を「る形」と呼び、過去形を「た形」と呼ぶ。同じく、継続相の非過去形を「ている形」と呼び、過去形を「ていた形」と呼ぶことにする。

## 参考文献

- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」言語学研究会(編)『ことばの科学1』pp. 181-212 むぎ書房。
- 仁田義雄(1989)「現代日本語のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』pp. 1-56 くろしお出版。
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- 奥田靖雄(1992)「動詞論」(初出) 引用は 奥田靖雄著作集刊行委員会(編)『奥田靖雄著作集 03 言語学編(2)』(2015)pp. 5-114 むぎ書房。による
- 飛田量文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版。
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』pp. 1-35 くろしお出版。
- 奥田靖雄(1996)「現実・可能・必然(中)」言語学研究会(編)『ことばの科学7』pp. 137-173 むぎ書房。
- 奥田靖雄(1999)「現実・可能・必然(下)」言語学研究会(編)『ことばの科学9』pp. 195-

261 むぎ書房.

中西久実子 (2006) 「「だれも」は肯定述語と結びつかないのかー「だれも等しく教育を受ける権利を有している」ー」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 2 文論編』 pp. 27-39 くろしお出版.

日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 5』 日本語記述文法研究会 (編) くろしお出版.

前田直子 (2009) 『日本語の複文ー条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版.

須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論-形態論的なカテゴリーと構文論的なカテゴリーの理論』 ひつじ研究叢書<言語編>第 65 巻 ひつじ書房.

野田尚史 (2019) 「とりたて表現の対照研究の方法」 野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 pp. 3-20 くろしお出版.

星野佳之 (2020) 「現代語の副助詞デモの各用法について-いわゆる「譲歩」「極端」と「例示」の関係について」『論究日本近代語 第 1 集』 pp. 375-389 日本近代語研究会.

#### 考察に用いたコーパス :

1. BJSTC 中日対訳語料庫 (中日対訳コーパス (第一版))
2. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (中納言 : 2.6.0 データバージョン : 2021.03 国立国語研究所)

Differences in the usage of *mo* and *demo* as modifiers of the interrogative, *dare*

-- Focusing on the verb predicate in action verbs

**ZHOU Kan**

(Graduate student, Osaka Prefecture University)

Regarding the difference between the usage of *mo* and *demo* after the interrogative word: the prior literature on this subject has so far not provided a comprehensive explanation for these variations. This paper explores the verb-predicate sentences using action verbs from the three perspectives of “*reality* + (*reality as fact*); *reality* + (*repetition (event)*); *reality* - .”

The main findings reached are, firstly, additional clarification on how the “ru form, ta form, teiru form, and teita form” of the predicates of the above verbs are classified by the concepts of “*reality* + (*reality as fact*); *reality* + (*repetition (event)*); *reality* - .” secondly, according to the above classification, further clarification is reached that at the conceptual level of reality, the difference between the syntactic distribution of *mo* and *demo* occurs after interrogative words.